



AUE News

2010年12月15日

第 6 号

編集・発行
愛知教育大学広報部会
TEL 0566-26-2738
FAX 0566-26-2500



目次

行事予定(12月16-31日)

トピックス

- ・留学生が知立東小の英語活動に参加
- ・ワーク・ライフ・バランス業界研究フォーラム
- ・附属図書館ブックツアー
- ・木の実工作教室
- ・地域連携フォーラム
- ・デュオコンサート
- ・中学生が附属図書館で職場体験学習

- ・禁煙支援キャンペーン
- ・読書マラソンコメント大賞表彰式
- ・冬の子どもまつり
- ・介護トーク昼食会
お知らせ・報告・投稿
- ・広州アジア大会にて
- ・発達障害研修会
- ・扶桑町生涯学習講座
- ・トヨタ自動車見学会
- ・FDシンポジウム

行事予定(12月16-31日)

- 20日(金) 6年一貫教員養成コース会議(16:40~ 第五会議室)
21日(火) 役員会(13:00~ 学長室)
22日(水) 交通安全講習会(13:30~ 講堂)
第3回公務員就職ガイダンス(13:30~ 第二共通棟411)
28日(火) 仕事納めのあいさつ(11:00~ 第五会議室)

トピックス

留学生が知立東小の英語活動に参加(12/1)

本学の外国人留学生が12月1日(水)、知立東小学校(知立市)での英語活動に参加した。

同校は全校児童のうち約半数をブラジルやペルーからの外国人児童が占めており、英語を使った授業が活発に行われている。この日も「ワールド集会」と題した英語活動が実施され、本学の留学生11人がゲストティーチャーとして招かれた。児童たちはクリスマスのコスチュームに身を包んだ留学生と簡単な英語でのコミュニケーションをとり、照れながらも、様々な国から参加した留学生と英語を使う楽しさを学んでいるようだった。昼休憩には留学生が各クラスに2人ずつ分かれて児童たちと一緒に給食をとり、嬉しそうな顔を見せた。

今回の経験は、留学生にとっては日本の教育現場において学校環境や教育方法を学ぶ経験になった。児童たちによる愉快的歌やダンスでの歓迎は日本での楽しい思い出の1ページにもなった。



ワーク・ライフ・バランス業界研究フォーラム(12/1)

「ワーク・ライフ・バランス業界研究フォーラム」が12月1日(水)午後1時30分から、本学大学会館大集会室で開催され、本学学生約70人が参加した。



このフォーラムは、愛知県ファミリーフレンドリー企業として登録された企業におけるワーク・ライフ・バランスの取り組みを紹介するとともに、その普及を目指す県の事業の一つで、本学は昨年度に引き続き会場に指定された。

第1部は「業界説明及びワーク・ライフ・バランス事例紹介」、第2部は「参加企業の個別説明」の2部構成で、参加企業である(株)トヨタミ、碧海信用金庫、(株)名鉄観光サービスの3社の担当者が説明した。

特に、企業がブースに分かれた第2部の「参加企業の個別説明」では、各企業担当者によるワーク・ライフ・バランス取り組み内容の紹介、企業概要、企業理念、業界の現況及び採用したい人物像など多岐にわたる説明が行われ、学生は時に大きくうなずきながらメモを取っていた。

学生にとって、このフォーラムは自己の働き方を考える契機となるとともに、就職活動における「業界研究」にもなったようだ。

附属図書館ブックツアー(12/1)

本学附属図書館では、12月1日(水)、名古屋市中区の丸善名古屋栄店で、院生・学生によるブックツアー(図書選書ツアー)を実施した。

今回は図書選書ツアーとしては初の試みで、講座・専攻の枠を超えた院生・学生の自由な発想のもと、大学図書館にふさわしい図書の選書(発見)に期待する目的で企画された。この企画は、10月7日開催の図書館委員会で承認された。

午後2時、同店に国語・数学・理科の3講座、発達教育科学、社会科教育の2専攻から推薦された院生・学生12人が集まり、それぞれ名札・カゴを持って選書を始めた。

院生・学生それぞれの立場から教育研究を広め、深め、発展させていくために必要な図書を約2時間かけて売り場から選んでカゴに入れ、ブックトラックに移すという行程で、あっという間に時間が過ぎ、選書は終了となった。

各講座・専攻ごとの選書を確認し(合計150冊)、「自分の選んだ本が図書館に入るとうれしいな」などと会話しながら、現地にて解散した。院生・学生が選んだ図書は、院生・学生による図書選書コーナーを設け、図書館内にて展示後に配架する。

附属図書館では、来年も同様に院生・学生による図書選書ツアーを続けていく予定。



木の実工作教室(12/4)

一般向けの公開講座「木の実工作教室」が12月4日(土)、刈谷市総合文化センターで開催され、家族連れなど約20人がドングリマスコットやクリスマスの飾りづくりを体験した。



主催は本学の科学・ものづくり教育推進センター。生活科のカリキュラムにドングリを使った工作があることから、同科を支援する研究のために今年初めて企画された。午前、午後の各教室には、刈谷、安城、碧南市などから計20人が参加した。

同センターの土谷徹研究員が、材料や道具の使い方などの説明をした後、参加者は早速、工作にチャレンジ。大学構内で集められたドングリやマツボックリなどの木の実をはじめ、市販のドライフラワーやリボンなどの材料から好みのパーツを選んで、土台の木片やリング状の枝などに飾り付けた。1時間余



で、ドングリを動物に見立てたマスコットを並べた置物や、造花や木の実を散りばめたクリスマスリースなど、思い思いの作品が完成した。

参加者は「ドングリなど身近な材料で、かわいいマスコットができました。親子で楽しめました」「素敵なクリスマスリースが手作りできました。帰ったら家に飾ります」と出来映えに満足そう。また「大学がこういう催しを無償でしているのは知らなかった。これから子どもと一緒に参加できるプログラムがあれば、ぜひ参加したい」という声も聞かれた。

土谷研究員は「同じ材料でもそれぞれ違う、個性的な作品ができます。自分で何かを考え、思い描いたものを作るトレーニングになるよう、僕らもキットを提供する際の参考にしたい」と話した。



地域連携フォーラム(12/4)



本学地域連携センターが主催した「地域連携フォーラム 2010」が12月4日(土)午後1時から大学会館大集会室で開催され、教育関係者や本学学生、教職員など約120人が参加した。

昨年度地域連携センター内に新設された「外国人児童生徒支援部門」が、フォーラムを通じ、地域に開かれた大学としてこれまでかかわってきた本学の外国人児童生徒支援活動を総括するとともに、課題を整理し、今後を展望する機会にするのが狙い。

テーマは「連携を軸とした外国人児童生徒支援の新しい展望」。外国人児童生徒の教育にあたり、これまでほとんど顧みられなかった幼保 - 小、小 - 中、中 - 高、という学校間の連携の課題と必要性を共に考察し、将来のスムーズな連携の構築を検討した。

テーマは「連携を軸とした外国人児童生徒支援の

冒頭、同センター長の横地正喜理事(連携担当)が「外国人児童生徒支援についての、いろいろなご意見を寄せていただきたい」とあいさつ。上田崇仁准教授(日本語教育)の司会で進行し、基調講演では岐阜県可児市立土田小学校の田中真治校長が、可児市での外国人児童支援をする「ばら教室KAN I」の取り組みにより、日本語だけでなく総括的な指導、多様な子どものニーズに応じた個別指導、進学希望者への対応の必要性が明らかになったことを報告。行政や教育関係者、保護者との連携の重要性や課題などを説明した。

続いて、ブラジル国籍で社会科専攻2年の若松グスタボさんが「1人の日系外国人大学生のライフストーリー」と題して、5歳で家族とともに日本に移住し、両親や学校の先生、友人に支えられて日本語や日本の学校に馴染んで大学に進学するまでの体験談を披露。「将来は高校の教員を目指している。日本で経験を積んで、いつかブラジル本国に帰って教育に貢献できるようになりたい」と将来の希望を語った。



後半のシンポジウムでは中田敏夫学系長(人文社会科学)の進行で、刈谷市立小高原幼稚園の加藤早苗園長、知立市立知立東小学校の川合基弘校長、同知立南中学の齋藤周洋教諭、愛知県立衣台高校の鈴木正博教諭が、各校での取り組みや連携の課題を発表。質疑応答では参加者から多くの質問が寄せられた。最後に都築繁幸教授(障害児教育)が閉会のあいさつをし、フォーラムは無事終了した。

デュオコンサート(12/6)

ピアニストとしても活躍する武本京子教授（音楽教育）とNHK交響楽団首席チェリスト・藤森亮一さんによる、ピアノとチェロのデュオコンサートが、12月6日（月）午後5時30分から本学音楽棟演奏室で開かれた。

このコンサートは、武本教授が日頃の研究成果を学生や教職員にも聴いてもらおうと企画し、藤森さんの快諾を得て急遽、実現した。これまで、アンサンブルでショパン、ラフマニノフとピアソラの作品集CDをリリースし、今月15日には新たにブラームスの作品集も発表。ピアノとチェロの音楽性を高め、アンサンブルとしての可能性を追求してきた2人のライブ演奏が聴けるとあって、学生、教職員ら100人余が会場に詰めかけた。



冒頭、ブラームス「チェロソナタ1番、2番」を披露。武本教授は「ブラームスの作品を聴いていると、どこからか“頑張れ”と聞こえてくる。皆さんに何かあった時に応援してくれるはずですよ。強さと情熱の中で昇華していく、そんな風に聴いてもらえたら」と話した。続いて、ラフマニノフ「チェロソナタ」ピアソラ「リベルタンゴ」など計7曲を演奏し、1時間30分にわたり聴衆を魅了した。

中学生が附属図書館で職場体験学習(12/6-10)

刈谷市内の中学生が「職場体験学習」を本学附属図書館で12月6日（月）～10日（金）に行った。



体験学習をしたのは中学2年の女子生徒2人。期間中は毎日午前9時から午後3時まで、職員に教わりながら、カウンター業務、書籍の整理、資料のコピーなど、図書館での様々な仕事を体験。8日午後は、書籍を管理するラベル張りに挑戦。新着の図書にバーコードや整理番号のラベルを所定の位置に丁寧に張り付けて、書庫に並べる準備作業を根気よくこなした。

本が好きで図書館での職場体験を希望したという2人は「図書館の仕事はカウンターが中心かと思っていたけれど、他にいろいろな仕事があることが分かりました」「職場体験をする前は、働くことは大変だと想像していましたが、楽しくできています」と、実際に職場を体験して、多くを学んだ様子。「将来、司書の仕事がしてみたい」と笑顔で話した。

禁煙支援キャンペーン(12/7)

2011年4月からのキャンパス内全面禁煙に伴う禁煙支援キャンペーンが12月7日（火）午後、第一福利施設前で行われ、生協が主催する生協フェスタの会場の一角で、学生と教職員の喫煙者を対象とする肺機能検査が実施された。

検査では、専用の機器を用いて、呼気中の一酸化炭素濃度を測定し、その結果からタバコによる体内への影響の状況を検査するもの。また、別の機器で測定した肺活量の数値から肺年齢を算出するという検査も行われた。

タバコの影響による検査には学生23人、教職員15人、その他（学外者）1人の計39人、肺活量の検査には学生25人、教職員7人が協力。検査をした男子学生からは「来年、全面禁煙になるのなら、もう、そろそろタバコを止めようかな」、



タバコを吸ったことが無い非喫煙者で検査をした女子学生からは「タバコを吸わないけれど、受動喫煙を受けているかどうかを確認したい」などの声が聞かれた。

読書マラソンコメント大賞表彰式(12/9)

大学生協が主催する「読書マラソンコメント大賞」の表彰式が、12月9日(木)午後5時から、大学会館大集会室で行われた。



「読書マラソンコメント大賞」は、学生の書いたコメントをきちんと評価しようと始まったイベントで、今年で6回目。全国の大学生協では約3万人、愛教大生協では570人がエントリーした。

表彰式で松田正久学長は「若い時に活字を拾って、目で追い、想像することが大切。一人ひとり、自分の世界を持つことができる。こういった表彰式をすることは素晴らしい」と読書の必要性を強調。橋本紡著「流れ星が消えないうちに」へのコメントで学長賞に選ばれた理科

選修1年の近藤香奈子さんに表彰状を授与した。

続いて、「生協理事賞」の竹内洋香さん(国語選修3年、朝井リョウ著「桐島、部活やめろってよ」)に清水秀己生協理事長から、「図書館長賞」の佐々木郁香さん(幼児教育選修1年、辻村深月著「ぼくのメジャースプーン」)に折出健二図書館長から、それぞれ賞状が授与された。他に、愛教大賞1~3位、特別賞などを合わせると、計18人の作品が入賞。全国版では奨励賞の国際文化コース3年の伊藤舞香さんらの4作品が入賞を果たした。

冬の子どもまつり(12/12)



本学の恒例行事「第34回冬の子どもまつり」が12月12日(日)に本学キャンパスで開催され、多くの子どもたちでにぎわった。

子どもまつりは、教師を目指している学生たちに子どもと触れ合う機会を提供する行事。毎年、春と冬の2回、学生たちで組織する実行委員会が主催し、子どもと遊び、学ぶための企画や遊びを用意して、一緒に楽しむという本学ならではの催し。冬は春の前哨戦として、1年生の委員が中心に

なって運営している。

午前9時40分からは第一体育館で開会式が行われ、催しの約束事などを確認。続いてプレゼント抽選会、×ゲーム、子どもまつりキャラクターとの撮影会や運動会、音楽会などが行われた。第二体育館や第一共通棟、中庭も会場となり、人形劇や紙芝居、折り紙や風車作り、弾き語り、社会科教育の学生によるゲーム「遊んで学べる社会科」など15種類余



のゲームが繰り広げられ、午後3時の閉会まで、子どもと学生たちの元気な声がキャンパスに響き渡っていた。

この日の参加は子どもが732人、学生が77人。市内から訪れた小学生は「大学生のお兄さんやお姉さんと遊べて、面白かった」と満足げ。参加した学生は「普段の授業では子ども



と触れ合うことがあまりないので、貴重な機会。子どもたちが喜んでくれて、頑張った甲斐がありました」と手応えを感じた様子だった。



介護トーク昼食会(12/14)

教職員を対象にした「介護トーク昼食会(介護は突然やってくる!)」と題した懇談会が12月14日(火)正午から、本部棟第二会議室で開かれた。

男女共同参画委員会の活動の一つとして、次世代育成ワーキンググループが、現在、介護をしている人の現状を話し合う場にと企画。この日は、現在介護している人、将来介護をする時のために心の準備をしたい人、計15人が参加。中には、高齢の母親の介護を心配する学生の姿もあった。

初回のこの日は、参加者がそれぞれの介護の現状や悩みを話し、ざっくばらんに意見交換する機会として設けられた。仕事をしながら介護を続ける大変さや、認知症の親を看る苦悩、施設や介護サービスの利用することに抵抗を感じるなど、介護者が抱える問題が次々に語られた。

同ワーキンググループ委員の中川洋子教授(音楽教育)は「介護の愚痴を言い合うのではなく、介護休暇の利用を進めるような有意義な会にしていきたい」と述べ、この日に出された意見を参考に、今後の会のあり方を検討することになった。



お知らせ・報告・投稿

広州アジア大会にて(投稿)

11月21日(日)から27日(土)までの日程で行われた広州アジア大会にNHKの解説者として行ってきました。担当はフィールド種目でしたので、日本人選手が今大会で獲得した四つの金メダルのうちの男女のやり投げで獲得した二つについて解説することができ、非常に運がよかったと感じています。一方で、少ない言葉数で本質を突くことの難しさも感じました。難しい言葉や専門用語を使えばそれなりの文章になりますが、それでは視聴者の方の理解が深まりません。

しかし、簡単な言葉を使ったり、難しい説明を省いたりすると多少の嘘が含まれてしまうこともあり、専門家としてこれは避けたいとの思いもありました。そこで、簡単な日本語を使いきちんと説明をすることと、視聴者の理解を深めることとの両立を目指しましたが、なかなかうまくいきませんでした。普段何気なく耳にする江川卓さんや掛布雅之さんの野球解説が如何に卓越した技術であるかを思い知りました。

ところで、今回の中国訪問は、私にとって2001年のユニバーシアード以来で、その間10年弱の期間が空いたのですが、この間にインフラがものすごい勢いで整備されたことを感じました。街には多くの高層ビルが立ち、日本でもあまりお目にかかることのないような超高級車がバンバン走っています。中国



といえば道には車や人よりも自転車が多いというイメージをお持ちの方は少なくないと思いますが、いまや自転車やバイクはほとんど走っていません。また、一昔前は、建物を建築する際の足場が竹を編んで作られていたのですが、今や金属の足場です。まさに、大都会という言葉がぴったりです。食事についても「食は広州にあり」という言葉のとおり、世界各国の料理を食することができますし、また非常においしかったです。特に広東料理は、四川料理とは違い、辛くなく、脂っぽさも思ったほどではなかったのです。



非常においしくいただきました。とにもかくにも、中国がこの10年で著しく発展したことを肌で感じてまいりました。しかし、どれだけ経済が発展したとしても、最終的な意思決定を行うのは人間です。この点に関しては、日本においても中国においても同様です。教育こそが重要であることは言うまでもありません。教育に携わる我々の責任は非常に大きいことを実感し、気を引き締めて帰国しました。

今回のアジア大会は、教育に携わる人間としての社会的な責任の大きさ、また専門家として一般の方に分かりやすく説明する責務があることを実感させてくれる非常にいい機会になりました。この経験を今後の愛教大における教育・研究活動に役立てたいと考えております。
(保健体育・木越清信講師)

発達障害研修会(投稿)

教育臨床総合センターでは、教職員対象に「発達障害」についての研修会をシリーズで開催しています。

最近の教育現場では、発達障害に関連する諸問題への適切な対応策が、切迫した重要な課題とされています。具体的な課題としては、発達障害の診断に関わる諸問題への対応、本人への適切な支援のあり方、保護者への対応についてなど、教育関係者が周知しなければならないことが次々と考えられるでしょう。

そこで本センターでは、まず本学の教職員に対して、発達障害についての最新の情報を提供し理解を深める支援の一環として、本センター所属の教員を中心にして研修の機会を設けることになりました。

第1回は、去る12月1日(水)に、保健環境センターの岡田暁宜先生を講師として開催しました。岡田先生からは、医学的な視点から発達障害をどのように理解するかについて、資料を提示しながら非常にわかりやすく解説していただきました。また医学的な視点での理解だけでなく、心理・社会的な視点からも発達障害について語られました。「発達障害」とは単一の疾患名ではないこと、スムーズに展開されない対人関係や不適切な環境、社会的な要因からも生ずることがあるなど、多様に理解されなければならない用語であることが示されました。できるだけ専門用語を用いず、具体的な場面を設定して話されたため、参加者の皆さんからはとても興味深くわかりやすい内容だったとの感想が多く寄せられました。

第2回は、12月8日(水)に、本センター専任教員の吉岡恒生先生を講師として開催しました。ここでは特に「アスペルガー症候群」に焦点をあて、その特徴や適切な対応について、文献に掲載されている事例を取り上げながら、参加者が具体的なイメージを持てるように工夫されて解説されました。後半は質疑応答形式で行われたため、参加者のニーズに、その場で応えることができたように思います。



当初、「果たして参加者が集まるのだろうか」との危惧もありましたが、2回とも20人を超える参加者に集まっただき、事後のアンケートでも「とても参考になった」との評価が多く、安堵しています。

第3回は12月14日(火)、本センター兼任教員の生島博之先生が講師となり、「こんなサポートがあれば!10の提案」をテーマに開催。以降、第4回1月26日(水)、第5回2月16日(水)と開催します。興味関心のある方は、是非参加していただければと思っています。

(教育臨床学・中川美保子教授)

扶桑町生涯学習講座(投稿)

12月3日(金)午前に約30人の受講者で、扶桑町生涯学習講座『いま、何が起きているのか - 経済を見る眼 - 』「体験型学習「株式投資ゲーム」で経済とリスクを考える」を同町中央公民館で開催しました。この講座は、厳しい経済状況が続く中で「正しく経済を見る眼」を養うこ

とで日常生活の様々な場面で役立てることを目的としています。東海財務局や愛知県の職員による5回の講座のうち2回を担当し、うち1回を東京証券取引所の株式投資ゲーム「ブルサ」の提供を受けて体験型学習を行いました。

株式投資ゲーム「ブルサ」は、経済に関する様々なニュースに基づいて株取引を行う体験型学習の教材です。経済に関する様々な出来事が起こる中で、それに合わせて投資を行うことを通じて、経済的なものの見方、考え方を養うために行いました。ゲーム教材による学習は初めての受講者がほとんどで、最初はやや戸惑いもありましたがすぐに慣れて、周りの人と相談しながら、楽しく学習することができました。



自ら主体的に活動しながら学習する体験型の教材の使用は、通常の講義形式の講座とは異なり、楽しくかつ有意義であったと受講者からは大変好評で、もっと時間をかけて行いたい、次は失敗しないようにまた行いたい、という意見を聞くことができました。

経済は生き物であり、日々刻々変化していくので、今後も社会全体の動きと日常の出来事との関係を常に興味を持って見ていくことが大切であるというまとめを受けて、受講者は継続的な学習の必要性を認識していました。
(地域社会システム・水野英雄准教授)

トヨタ自動車見学会(投稿)

企業活動と社会や経済の関係を知るために、「経済のグローバル化とそれに伴う製造業の動向」というテーマのもとで12月8日(水)午後に学生、教職員合わせて37人にてトヨタ自動車の元町工場とトヨタ会館の見学を行いました。厳しい経済状況の中で製造業にも大きな変化が起こっており、そのような状況のもとでトヨタ自動車のようなグローバル企業において生産工程での工夫や海外との貿易、直接投資などがどのようになされているのかを学びました。



見学によって工場内での効率化された設備や工程、環境や働く人への配慮、安全対策について知ることが出来ました。「カイゼン」といわれる提案制度による生産工程の改革が効率的な生産につながっていることや、ひとつのラインで複数の車種やグレードの車が生産されていることから技術水準の高さを知ることができました。体験コーナーでは実際の工具等を触って、作業内容やそのための技術を実感しました。

見学では充実した内容の説明を受け、移動のバスの車中では質疑応答を行いました。

その後、トヨタ会館では様々な展示施設から自動車の仕組み、特に環境対策に配慮した新しい車の技術やその生産、安全対策等について学びました。また、ロボットによるトランペットの演奏やiunitの走行を見ることができ、その技術力の高さに驚きの声を上げていました。

トヨタ自動車の見学は今年で4回目ですが、めまぐるしく移り変わる経済状況を反映して毎年変わっていくトヨタの進歩を見て、経済状況と企業活動の密接な関係について認識を新たにしました。

見学に当たり、トヨタ自動車の関係の皆様方に変なお世話になりました。心よりお礼申し上げます。

(工場内の写真撮影は禁止されているため、トヨタ会館での見学の写真を掲載しています。)

(地域社会システム・水野英雄准教授)



FDシンポジウム(報告)

教育創造開発機構大学教育・教員養成開発センターでは、12月9日(木)に、先に結成された学生教職員ボランティア団体「あいこね委員会」(正式名称 愛教大C o N a n d E 委員会)と

共同で、本年度初めての学生・職員参加型 FD シンポジウムを開催しました。

FD とは本来の意味では大学教員の職能開発 (Faculty Development) であり、それを目的とした研修会は従来大学教員のみで行なわれてきましたが、近年、大学教育界においては、FD を広く解釈して < 大学共同体の最大構成員である学生 > やその < 支援者である職員 > にも参加いただいて、大学教育全体の改善を図るという傾向が出てきました。

本学においても、本年夏に FD のための学生・教職員ボランティア団体である「あいこね委員会」が発足し、8月28日、29日の立命館大学における「学生 FD サミット」へ参加し、大いに刺激を受けた学生スタッフが中心となって、週に2回、昼休み時間に集まって、委員会としてどのような活動ができるか話し合いながら、いくつかの活動を展開してきました。

今回、その活動の趣旨を全学的にご理解いただくとともに、それをより良く活発なものにするため、「学生の声を聴く FD はどうあるべきか」というテーマで、「学生 FD の父」と呼ばれる立命館大学の木野 茂教授をお招きして、学生・教職員が自由に参加できる談話会形式の FD 研修会を企画、実施しました。

まずは、木野先生から立命館大学における大学教育活動への学生参画の状況やその意義について講演いただき、その後、学生スタッフがコーディネーターとなり、4つのグループに分かれて、本学の教育活動の現状や大学について感じていることを、学生・教員・職員の立場から率直に意見を出し合いました。

委員会の発起人であり、今回のFDシンポジウムを学生と共に企画された大澤秀介教授の「FDとは本来楽しいものでなくてはならない。それには、Food & Drink だ！（頭文字は、いずれもFD）」というコンセプトのもと、軽食をつまみながらのグループ・セッションでは、参加者の気持ちもほぐれ、話題は真剣ながらも、笑い声が聞こえる終始和やかな雰囲気での意見交換が行われました。



最後に、各グループのコーディネーターから、意見交換のまとめが発表され、木野先生から講評をいただき、今後の本学におけるFD活動に資する貴重な意見を得ることができ、初めての企画ながら、委員会の名称の基になった「Committee of Non-obligation and Edutainment = 義務ではなく、教育を楽しむための委員会」を体現する充実したFDシンポジウムとなったのではないかと思います。

(教育創造開発機構運営課 大学教育・教員養成開発センター担当 満田 清恵)

編集後記

「AUE News」の名称に変わって、早くも今号で6号目。号を追う事に情報が増えて、紙面が充実してきました。毎号感じるのは、愛教大の学生や教職員が、さまざまな活躍をしていること。学内外の活動を広報スタッフだけではとても追い切れず、紹介しきれないニュースや情報も多々あるはず。そんな時は、ぜひ皆さんが「AUE News 特派員」として、レポートを寄せてください。お陰様で投稿も増加しているので、そろそろ簡単な投稿要領を用意しなくては、と思うこの頃です。(K)

*次号の第7号は12月28日(火)に発行する予定です。

投稿のお願い

学内外の出来事(教育・研究・地域連携・国際交流・学内事業など)に関するニュースの提供をお待ちしております。

メール: kouhou@m.auecc.aichi-edu.ac.jp 編集責任者: 総務担当理事 折出 健二